

## カナダ・メソヂスト教会の日本宣教——試論

布施英雄

### はじめに

1872年4月、カナダ・トロント市の中心に、赤煉瓦の壮麗な教会堂が建てられた。高く聳えた塔、2200の会衆席と260の聖歌隊席をもつ、ウェスレー派メソヂスト教会の本拠メトロポリタン教会である。人々はこれを『メソヂスト大聖堂』と呼んだ。その塔の下の正面玄関の左奥の壁に一枚のプレートがあり、『神の栄光と、此処で行われた歴史的なイベントに対する感謝の記念として、1873年5月7日、日本への最初のカナダ宣教師、神学博士 George Cochran 牧師と医学博士 Davidson Macdonald 牧師の派遣式。1874年9月16日～10月2日、カナダ最初の全国組織カナダ・メソヂスト教会の第一回総会。1925年6月11日～18日、カナダ合同教会の最初の全体協議会』と記されている。このプレートが語るのは、第一に、日本宣教を開始したのはウェスレー派メソヂスト教会で、2名の宣教師が選ばれたこと。第二に、ウェスレー派メソヂスト教会は、カナダ全域に教勢を広げて、『カナダにある (in Canada) ウェスレー派』から『カナダを代表する (of Canada) メソヂスト教会』になったこと。第三に、カナダ・メソヂスト教会は、カナダの国家形成に対応してプロテスタント大合同を達成し、カナダ合同教会となったことである。即ち、このメトロポリタン教

会はカナダ・メソヂスト教会の歴史を象徴する記念塔であり、その歴史の中で日本宣教は画期的な事象であったことを示している。従って、カナダ・メソヂスト教会の日本宣教を語るには、第一に、ウェスレー派メソヂスト教会はどのように形成され、発展し、カナダ・メソヂスト教会になったのか、第二に、カナダ・メソヂスト教会はどのように日本宣教を開始し、どのような枠組みで取組んだのか、そして第三に、日本で宣教はどのように展開されたか、を語る必要がある。

### 1. ウェスレー派・メソヂスト教会の形成と発展

英国圏でメソヂストの組会が生れたのは 1738 年、信徒説教者が各地を巡回して宣教を始め、巡回区が形成されたのは 1746 年以降であるから、それ以前に新大陸に移住した人々の中にメソヂストがいても、何も起こらなかった。しかし、メソヂスト移民が増え、互いにその存在を意識すると、自発的にメソヂスト集会が形成され、巡回説教者が登場する。1766 年、アイルランド移民の P. Embury がニューヨークで集会を開き、信徒説教者となって教会を建設し、アイルランド移民の R. Strawbridge 女史が、メリーランド州でメソヂスト会を組織した。1869 年、Wesley は 2 名の巡回説教者を送り、1771 年、信徒説教者 F. Asbury が本格的な宣教を始める。独立戦争終結の翌年の 1784 年、Wesley が総理に任命した T. Coke と共に、米国ボルチモアでメソヂスト監督教会を創立したことは周知の通りである。

カナダでは、100 年続いたフランスの植民地が、ノバスコシアを英国に占拠され、ケベック、オンタリオも次々占領されて、1763 年のパリ条約で英国領となった。この条約には、カトリック教会が慣例に従って体制を維持できる条項があり、ケベックを中心にフランス文化は維持された。英国は、カナダの英国化を進めるために、英国領のニューイングランドからノバスコシアに大量の住民を移住させたが、その中にピューリタンの伝統をひく非国教派が多かったのので、ここの英国教会は伸びなかった。

メソヂストがここに姿を見せるのは、1772 年、英国ヨーク州からの移民の一団が入ってからである。彼らは名目上は英国教会に属したが、ウェスレー派の伝統に従って個人的にメソヂスト集会を持った。やがて第二次の信仰復興運

動が押し寄せると、組会が組織され、巡回区が生れ、移民の青年 W. Black が信徒伝道者となって伝道に励み、ノバスコシア一帯にメソヂスト会を立ち上げた。彼はこの地域を代表する指導者になり、1784年のメソヂスト監督教会の設立総会に出席し、協力を得て2人の巡回伝道者を派遣された。その目覚ましい働きでメソヂスト運動が高まり、4つの巡回区に6人の巡回説教者が揃った1786年に、非公式ながらカナダ・メソヂスト会の総会が開かれた。Black は、1789年に Coke と Asbury から按手を受け、ノバスコシアで成長を続けるウェスレー派メソヂストの統括長老となり、此処にメソヂスト優位の基盤を作った。

ここのウェスレー派メソヂストは心情的に王党派 (Loyalist) で、英国教会に友好的であったが、米国に続き本国でも起きた英国教会からの独立の動きが此処にも及んで、1792年には英国教会の礼拝時間に自分達の集会を開くことを決議した。しかし、集会が固定化すると巡回説教者の定住化が進み、巡回区に不満が起き、アメリカ調の伝道方式にもかなりの反発があり、米国メソヂスト監督教会は説教者を引揚げてしまった。そこで Black は英国に行き、資金集めと海外事業促進の団体「英国ウェスレー派メソヂスト宣教会」の説教者を連れ帰った。彼らは熱心な福音伝道者だが、英国メソヂストの穏健な気風で人々に接し、信徒会では教会規律を守るように指導したので、この地にウェスレー派メソヂストが定着するようになった。

一方、1775年～83年の独立戦争は、英・米の関係だけでなく、カナダにおけるメソヂスト教会の展開にも影響を与えた。独立戦争は市民革命であり、革命側が勝利すると、英国軍人や英国に忠誠な王党派は米国を去り、ノバスコシアには約3万人が流入したので混乱が起きた。英国政府は、オンタリオ周辺に土地を供与し、ここに王党派の集落が生れ、英語圏が広がり、ウェスレー派メソヂストの進出を容易にしたのである。

そのオンタリオでは、米国のメソヂストたちがここを手付かずの収穫場として進出し、1812年当時、住人の8割は米国出身であった。米国のメソヂスト監督教会は、76人の説教者を送り込み、10の巡回区が作られると、米国メソヂスト監督教会は、ここを「ニューヨーク年会のオンタリオ地区」とし、地区監督を送り込んだ。

しかし、カナダは本来、先住民の土地であり、侵入する米国人に対しする彼

らの反撃が引金となって、1812～14年の米英戦争に発展する。米国軍はオンタリオに侵入して、トロントも戦火に見舞われるが、英国軍がこれを撃退し、米国人は引揚げてしまった。その空隙に東部の沿海地方から人々が移住し、ウェスレー派メソヂストもこれに混じって進出した。この戦争で、米国に対する反発が強まると、メソヂスト監督教会から離脱したり、内部で改宗するものが出出して、1828年、米国メソヂスト監督教会は地区監督を引揚げ、ここのメソヂスト監督教会体制は崩壊した。1833年、離脱したカナダ人メソヂスト教会とウェスレー派メソヂスト教会は、英国教会の会議制や宣教方式を採り入れて合同し、カナダ・ウェスレー派メソヂスト教会になったのである。

この戦争によるカナダ人の反発は、米国だけでなく英国にも向けられた。産業発達で経済も人口も優勢な米国に比べ、広大な未開地を抱え、経済も人口も米国に劣るカナダは、英国政府の植民地統治を脱して自主発展の道を求めた。1867年、オンタリオ、ニューブランズウィック、ノバスコシアは、連邦制をとって自治領カナダとなり、他の地方も次々と加わって国土の開発が進んだ。

新大陸の開発を教会が先導したことは、カナダでも顕著であった。以前から、伝道に併せて人々の教育や文化の向上に取り組んできたカナダの諸教会は、学校開設や文化活動に行政費を引き出して自主的に運用し、これが教勢の拡大にも繋がった。即ち、社会の開発と教勢の拡充は一体化していたのである。当時は、未信者でも、教会に通うことが社会的身分の証しであったという。しかし、自治領カナダの統合が進むにつれ、国教化の意見が浮上する。これに反発して教会の主体性が強く意識されると、伝道上の競合や重複を避けて、体力強化のために分派の合同を進めた。ウェスレー派メソヂスト教会の場合は、英国教会と距離を置くメソヂスト・ニューコネクションや、東部沿海地方のメソヂストグループとの合同協議を進め、1872年にメトロポリタン教会を落成すると日本宣教に踏み切り、1874年に合同を達成して、カナダ全土にわたる最初の教会、『カナダ・メソヂスト教会』となったのである。

カナダ・メソヂスト教会の日本宣教は、その10年後から本格的な宣教に入るから、その宣教を支えたカナダ・メソヂスト教会の発展についても触れておく必要がある。1881年当時、メソヂスト派は、カナダ人口の17%を占める最大の教派であった。最大は英国ウェスレー派の流れを汲むカナダ・メソヂスト教会

で、次に嘗ての崩壊から立ち直ったメソヂスト監督教会、他の2つは少数の聖書キリスト教会と原初メソヂスト教会であった。1884年、最後のメソヂスト合同を果すことになるのだが、注目すべきは、カナダ・メソヂスト教会は議長制、監督教会は監督制、ほかの2派は信徒代議制であるから、通常ならば円満な合同はありえない。しかし、違いを受け容れて共存するカナダ特有の友愛（Fellowship）の精神で、会議制に信徒を加え、監督制に代わり議長と総理の二頭制の方式を採用して、強く福音主義を打ち出し、国民の靈的・道徳的な向上に取り組むことになる。その初代総理になったのが J. Woodsworth で、彼は、マニトバ州やアルバータ州の開拓を支援し、先住民に対して学校教育を進め、北西部に英国風の体制を定着させた。彼はまた、日本宣教にも熱心で、特に婦人宣教師の教育と伝道を支援した。1887年には、米国メソヂスト教会から都市伝道の方式を採り入れて、社会事業にも取り組んでいる。やがて、この友愛精神はプロテスタント大合同に発展する。英国教会の提案で、メソヂスト教会、長老派教会、会衆派教会が合同に向けて辛抱強い協議を重ねた。英国教会はランベス四綱領が超えられず、長老派にも分離が生じたが、1925年、トロントで8000人の合同集会を開いて『カナダ合同教会』となった。

## 2. カナダ・メソヂスト教会の日本宣教の枠組み

カナダ・メソヂスト教会の日本宣教は、宣教師と宣教を支える組織によって推進された。宣教師には、教会が生活を保障し、活動を支援して、所定の宣教をする教会宣教師と、現地の有給職で生計を立てながら教会の宣教に協力する自給宣教師と、教会の外部組織である婦人宣教団体から生活保障と活動支援を得て宣教をする婦人宣教師がある。また、宣教師を支援し、統率する組織としては、教会の総合宣教局と婦人宣教師会と、自給宣教師団があり、日本において宣教を統率する教会組織としては、カナダ・メソヂスト教会の日本部会や日本年会としての日本メソヂスト教会があり、三派合同後の日本メソヂスト教会は、日本が主体で北米3教会が協力する体制となったのである。

### 宣教師

カナダ・ウェスレー派メソヂスト教会は、1860年頃から、オンタリオの西に

宣教師を派遣していた。自治領政府が北西部開発に乗り出すとこれに呼応して、マニトバから、ロッキー山脈を越えて太平洋岸のブリティッシュコロンビアまで、先住民の教育と移民への伝道のために宣教師を派遣した。

しかし、政府はここに英国式の社会を形成するために英国から開発者を導入したので、宣教師の役割に変化が生じた。1871年、キャサリン市で開かれた宣教師会(The Missionary Society)で2つの決議案が出され、第一は「宣教師会は速やかに外国伝道の基盤作りに取り組むべきである」で、第二は「日本に宣教するために、代理人を派遣するのが宣教師会の義務である」であった。

本国に多くの宣教課題を抱え、財政的にも万全でなく、慎重意見が出たが、世界宣教はメソヂストの本分と説く宣教会議長 W. Punshon の進言で決定した。彼は英国の有名な説教家で、カナダ在住の5年間、宣教会のために働いた。1872年、米国メソヂスト監督教会の年会に友愛代議員として招かれ、日本宣教にアジア情勢に詳しい R. Macley らが向かうと知り、カナダからも宣教師を派遣することが決まった。とはいえ、日本については正確な情報がなく、現地調査と宣教の基盤作りを託すために、最善の人材を派遣する事になり、メトロポリタン教会牧師で学識・品格に優れた G. Cochran と、高い知性と謙虚な人柄で医師資格を持つ D. Macdonald 牧師が選ばれたのである。

カナダ・メソヂスト教会の任命する日本宣教師は、夫人も含めて、総合宣教局の所属となり、給与、任期、業務、報告など、宣教局の規則に従うことになる。宣教師には、教会が任命する宣教師以外に、自ら志願して現地で収入を得ながら宣教する自給宣教師がある。自給宣教師は聖職者に限らず、学校教師や学者もいたが、宣教師としては総合宣教局に属した。当時のカナダの教会は、自治領カナダの発展に伴って事業規模が拡大する一方、経済低迷で宣教資金に影がさし、日本宣教自体は軌道に乗っても増員や設備拡充に応えられず、Cochran の焦りにも反映している。他方、日本では、西欧文化の吸収を急ぐ各地の学校で外国人教師の需要が高く、宣教師が教師の収入で生活し宣教すれば、教会の負担軽減だけでなく、日本の青少年やその周辺の人々に日常的かつ自然に接して宣教する機会を得ることが出来た一石二鳥の方式であった。日本宣教の好機が訪れた1885年、C. Eby は急遽帰国し、『5年間で25人の宣教師と100の日本人伝道者を集める』と豪語して、自給方式の宣教師を募集し、自給宣教

師団を組織してその責任者になった。自給宣教師団は、宣教師の収入を総合管理して、教会宣教師並の給与や活動費を支給し、その余剰をもって総合宣教局の主管以外の独自の宣教事業に当てるもので、1890年にEbyが開設した中央会堂の学生伝道事業はその典型である。自給宣教師は、宣教師会議には参加できなかったが、宣教局資金で行われる事業には関与できなかった。この自給宣教師には、Cassidy, J. Saunby, D. McKenzieら多才な人材が応募して日本宣教に大きく貢献した。これは1890年のH. Coates宣教師で終了したが、それまでに11家族19人が来日した。この間の教会宣教師は8家族13人で、彼らのお蔭で日本宣教が発展したと言える。

またこの年までに、12人の独身の婦人宣教師が来日して、東京、山梨、静岡に英和女学校を開設している。婦人宣教師は、カナダ・メソヂスト教会の外団体として結成された婦人宣教師協会(WMS)に属する。1878年、カナダ社会の変化に伴い、伝道に様々な社会問題が絡んで、男性主体の伝道方式に困難の影がさしたて、婦人伝道師の役割が認識されるようになり、教会に支援組織が生れた。1881年、ハミルトン市のウェスレー女子大学の集会で、ミスM. Cartmellが「自治領のための婦人伝道会の設立」を發議した。その活動項目の一つに『日本で婦人伝道師の活動を支援する』項目があり、翌年、市内のセンテナリー教会で行われた総会で、『メソヂスト婦人宣教師会(MWS)』が設立され、ミスCartmellが最初の婦人宣教師として日本に派遣された。婦人宣教師は1882年～1925年に53名を数えた。これは、総合宣教局の宣教師112名の約半数に当る宣教勢力で、教育宣教師が大半だが、ミスJ. Howieのような伝道宣教師もいたし、ミスA. Allenのように教育から社会事業に移った宣教師もいた。

1925年以降、カナダ合同教会になっても宣教師は従来とおり派遣されたが、男女の宣教師はすべて合同教会の海外宣教局(BFM)の所属になった。

## 宣教組織

宣教師の身分や活動は、カナダ・メソヂスト教会の総合宣教局(GMB)の下にあるが、現地では宣教師団(後に社団となる)を組織して、任地決定、事業の計画、現地の伝道者との協議、宣教資金の運営、宣教師館・教会・学校などの資産管理、宣教局との連絡・協議などを行った。しかし、それを教会規則に

従って正しく執行するには、総会・年会・四季会・部会・委員会などの組織が必要であり、本国カナダの教会体制の中に正しく位置付けられねばならない。最初、G. Cochran と D. Macdonald により規則に従い聖務が執行され、組会などの信徒集会が形成された。3年後、Eby と Meacham が来日した翌日の明治9年9月9日、Cochran 邸で会議を開き、正式にカナダ・メソヂスト教会トロント年会に属する東京部会となった。翌年には、築地の四番館、更に五番館を購入して本部とし、教会や講義所を建て、日本人教職試補を任命し、伝道態勢を整えて、東京部会として正式の活動を展開した。明治22年までの13年間、「カナダ・メソヂスト教会」の名のもとに宣教が進むことになる。

やがて、東京市内、静岡県各地、山梨県各地に教会が開設され、日本人信徒の活動により宣教が担われ、教職試補から按手受領者も出て、宣教の基本体制が整った。しかし、日本の状況に適切かつ速やかに対応する宣教の推進が求められると、宣教方策の決定権のある年会昇格が必要となり、カナダのメソヂスト教会との交渉が始まった。その教会規則では、カナダの教会総会に登録された按手礼受領者15名以上が条件であった。1888年当時、日本にいる宣教師中受按は7名で、日本人は山中笑、橋本陸之、小林光泰、按手予約が登録された平岩愼保、杉山彦六、細井某を含めて6名の計13名。自給宣教師 T. Large と日本人外山孝平について按手が予定されているとして15名が整った。また、それらによる宣教部門・会計部門の担当、その他の体制も内定されてカナダにおける総会で日本年会設立の手続きを終了し、日本での設立手続きに入った。

明治22年6月、築地教会でカナダ・メソヂスト教会の日本宣教会議が開かれた。メソヂスト教会総理 A. Carman と J. William の委任を受けた総合宣教局の総幹事 A. Sutherland の指揮で会議を進め、議長に D. Macdonald、書記に F. Cassidy、補佐を日本人教職が担当して、カナダ・メソヂスト教会日本年会の成立が宣言された。その名称は「日本メソヂスト教会」と決定。続いて各種委員会と、地域ごとに教務を統括する東京部会、静岡部会、山梨部会が設置され、委員長や部会長など責任部所は宣教師が担当したが、委員会や教会は日本人が担当した。部会は、翌年に金澤部、5年後には長野部が増設され、夫々の地域で宣教態勢が充実していった。注目すべきは、東京年会の成立と同時に、在日のメソヂスト各派教会の合同を検討する委員会が設けられたことで、この委員会は他のメ

ソヂスト教派でも検討されて、明治39年7月、カナダ・メソヂスト教会、メソヂスト監督教会、南メソヂスト監督教会の代表委員が、カナダに最も近いニューヨーク州バッファロー市で協議し、日本にあるそれぞれの教会の教師と会員を合体し、新たに教会条例を定めて『日本メソヂスト教会』とすることが決議された。明治40年5月、青山学院で総会が開かれ、3教会66名の代議員により、教会条例が可決され、会員制、礼拝式、教職、会議制、財政、地区制などが決められた。この日本メソヂスト教会は、日本人の教職・信徒が主力となり、北米3教会の宣教師はこれに共同して宣教に当ることになったことは周知の通りである。ここでも監督制が注目されたが、監督の名称は残すが、長老の身分のまま総理職に着くという計らいがなされた。かつて司祭 Wesley が初代教会の長老に倣って主教の按手を行ったこと、1884年メソヂスト教会合同で前述の Carman が成立させた2人総理制がないのも興味深い。

### 3. カナダ・メソヂスト教会の伝道・教育・社会事業

カナダ・メソヂスト教会の日本宣教は、最初は宣教師の伝道で始まった。その伝道を促進するために、伝道者養成や女子教育のための学校設立が続き、更に日本社会のさまざまな局面が作り出した不幸な歪みを是正するための社会事業へと続くことになる。

これまで述べた通り、カナダ・メソヂスト教会は、殖民地開発から国家形成までのさまざまな地域でさまざまな住民に寄り添って、伝道、教育、慈善事業を一体的に行ってきた。また、友愛の精神は、教会合同だけでなく、立場の異なるものと共に生きていくことを体現してきた。例えば先住民を排除して僻地に囲い込むのではなく、その文化を尊重しながらその場で生きてゆく道を創った。カナダは人種の坩堝でなく、人種のモザイクだと言われるゆえんである。これは日本宣教においても見られる。成果目当ての華々しい宣教でなく、農村や異教の町などで、人々と折り合い和みながら、じっくり腰をすえて地味な働きを続けた宣教師のことはよく知られている。

但しここでは、その全容を語ることは出来ない。基本的な宣教体制は明治22年までに枠組みができたので、その範囲に留める。但し、社会事業に就いては、大正期以後になることをご了承いただきたい。」

## 伝道

それは G. Cochran と D. Macdonald の旅立ちから始まった。1873 年 5 月 13 日、ハミルトン市センチナリー教会で送別会を終えるとすぐに日本へ旅立った。Cochran 夫妻は 3 人の幼い子を連れて、馬車・汽車・船を乗り継ぎ、北米大陸と太平洋を横断する地球半周に近い 48 日の旅の末、6 月 30 日に横浜に着き、山手 143 番館に旅装を解いて『カナダ・ウェスレイ派・ミッション』の表札を出して活動を開始した。

すでに新旧諸派が密集して外国人だけが住む横浜に比べ、築地では貿易商に代わって聖公会・改革派・長老派が進出し、宣教態勢を広げている状況を知ると、Cochran の思いは募った。一方、明治 5 年の学制発布で一斉に学校が増え、欧米の学問が脚光を浴びると外国人教師の需要が高まった。明治 7 年 4 月、静岡に移った幕府学問所の後身の賤機塾に招かれて Macdonald が赴任、理化学を教えながら伝道して、教授の山中笑、塾生の杉山彦六ら 11 名に授洗し、組会を立ち上げた。また医師として静岡病院をはじめ沼津などでも医療を行って信頼を得た。他方、Cochran は、英国留学の経験もある中村敬宇に招かれ、8 月、小石川の英学塾同人社に住み込んで伝道し、家族も協力して、同年クリスマスに中村一家、翌年 8 月に職員と浅川広湖、11 月に平岩愼保に授洗して、組会を立ち上げた。当時、居留地以外に外国人の居住は禁止されていたので、江戸進出を果たした Cochran は「神の手が動いた」と書いている。しかし、夫人は心労が重なって体調を崩し、明治 9 年春、一家は駿河台に仮寓した。待望の第二陣の宣教師 C. Eby、と G. Meacham を迎えた 9 月 9 日、4 家族で東京部会を立ち上げ、山中笑、平岩愼保、杉山彦六を教師試補に任命した。ここから日本人の宣教協力が始まる。築地 4 番館を購入して Cochran と Eby が移り、Meacham は沼津の江原素六に招かれて赴任し、寺に仮寓して、読経を聞きながら礼拝を続けた。東京各所に講義所が設けられ、明治 11 年、Macdonald が静岡から東京に戻り、隣の築地 5 番館に入ると、Eby は、山梨県南部町の青年達に招かれ、平岩愼保を伴って伝道を開始した。直ぐ県都の甲府に拠点を移して巡回区を設け、青年等と伝道に励んだ。東京、静岡、沼津、甲府に宣教拠点が出来て伝道が広がる

につれ、伝道者不足がつのり、日本人伝道者の育成が急務となった。

### カナダ・メソヂストの教育事業

明治12年、夫人の療養で帰国した Cochran は、宣教局に神学校開設を強く訴え、明治17年、再来日すると、麻布鳥居坂に2000坪の土地を得て、50坪の校舎と40坪の寄宿舎を建てた。しかし、外国人経営の学校は認可されなかったため、麻布教会牧師小林光泰が設立者となり、宣教師を雇人の形で出願した。神学校は認可されず、やむなく、尋常科・高等科の普通学校に変更し、漸く東京府の認可を得ることが出来た。当初は、校主：小林光泰、校長：G. Cochran、教頭：R. Whittington、漢文、数学の教師に、英語は Cochran の長女 Maud が担当した。当時はメソヂスト教会の成長期で、入学希望者も多く、翌明治18年には100坪の校舎を増築し、生徒数も200を超えて、ますます宣教師の増員が急務となった。一方、明治13年に東京に戻った Eby は、福音伝道のために100人の宣教師による基督教大学を構想するが、それが計画倒れになると、東京帝国大学の門前に学生伝道の中央会堂を計画し、それに備えて帰国、前述の自給宣教師の募集を始めた。翌明治19年に法改正で神学部の開設が認可されると、明治22年には、校長平岩愼保、神学部長 Cochran、文学部長 Whittington、教授に T. Large, C. Moor, D. Macdonald を揃えて伝道者養成の体制が整った。しかし、出る釘は打たれるの譬え通り、明治32年、私立学校令の公布に併せて出された文部省訓令第12号は、官公私立を問わず、宗教教育を禁止し、違反すれば学生の徴兵猶予を認めないという主旨で、キリスト教系学校には大きな打撃となった。交渉の結果、授業でなく自由参加ならよいとされたが、学生数が激減し、明治33年に普通科が廃止され、明治34年、神学校も閉鎖が決まった。

一方、この影響を受けることなく発展したのが、婦人宣教師が開設した東洋英和、静岡英和、山梨英和の三英和女学校である。ミス Cartmell が、最初の婦人宣教師として来日したことは既に述べた。明治15年12月27日に City of Tokyo 号で横浜に着くと、築地の宣教師館に入り、日本語の勉強の傍ら、病人の間安や祈祷会を開き、三原橋際の築地教会で聖書クラスを開いた。彼女の本来の目的は婦人伝道者の養成にあったから、教育はむしろ伝道のための道具であった。それ故、学校は寄宿制が原則で、女生徒たちは、常に基督者の教師を身近に受

けつつ、友人を通して伝道するように訓練されるべきであると考えた。明治17年、東洋英和学校に隣接の382坪を購入すると、当初は英和学校の教室を借用し、別に女生徒20名と2名の婦人宣教師が入る寄宿舎を建て、東洋英和学校と同様に、校主小林光泰、校長ミス Cartmell、日本人教師3名で10月に開校した。宣教師のための経費以外は独立採算制としたが、翌明治18年には生徒数も急増したので、校舎を増築して、50名の寄宿生と200名の普通生を受け容れた。ミス Cartmell の健康が悪化して一時帰国し、新任のミス E. Spencer が校長を継いだ。当初の目的に沿って、生徒には厳しい日曜規則が課せられた。9時から日曜学校、礼拝、4時から祈祷会、賛美歌唱和、7時夕拝、9時就寝で、これを守らないと退学処分もあった。婦人宣教師も順調に増強されて、明治19年にはミス S. Wintemute、20年にはミス H. Lund とミス M. Cunningham、21年にはミス F. Morgan、ミス J. Munro、ミス E. Preston、ミス I. Blackmore の4名が来日した。彼女らは、派遣先の教職や信徒の協力を得ながら、明治21年にミス Cunningham が静岡英和を、22年には Wintemute が山梨英和を設立した。

静岡では、明治20年末に、数名の信徒が私立女学校を開いたが、経営不振で半年で閉校した。寄宿生16人、通学生35人の全員が静岡教会に出席していた。静岡県知事は、当時、静岡勤務の平岩愼保を伴って直接、東洋英和女学校を視察し、静岡に戻ると、宣教師の派遣を婦人宣教師会に要請し、建物を提供し、運営費を調達することを信徒らに約束させた。東洋英和からミス Cunningham が派遣され、最初の一年間は、3人の日本人教師と宿舎を兼ねた大きな日本家屋で授業が行われた。女生徒たちは畳に座って低い机に向かい、寄宿生は食堂の食卓の周りで宿題をしたが、直ぐに新しい校舎が建てられた。ミス H. Lund とミス K. Morgan が協力し、ミス Cunningham が学校運営の実質的な責任をもったが、法律上の責任は株主代表の日本人にあった。地方では基督教に対する偏見が強く、生徒数は東京のように増えなかったが、基督教学校の評判は広まった。明治21年、静岡教会の小林光泰が女生徒たちの組会を立ち上げ、翌22年には、信徒6人と日本人教師5人の全員が受洗した。

山梨では、早くから女学校開設の希望を宣教師会に伝えていたが、保留されていた。明治22年、甲府から婦人宣教師会に強い要望があり、ミス Wintemute が急遽、通訳を連れて甲府に入った。彼女は伝道しながら開校手続きを進め、6

週間後の6月に6人の生徒で開校した。発起人代表が開校挨拶で「要するに、我らの願いは、妻として従順かつ貞節で、母親として子供を教育し、夫の両親に平安と楽しみを与えうる女性を作ることである。」と述べ、ミス Winntemute は「私は結婚の経験がないから...」と微苦笑したという。最初の教室は、目抜き通りに面した二階建ての商店で、3年以内に、新しい建物を準備する、資金も集めると約束したが、そうならなかった。偏見と無智、基督教を嫌う仏教徒などの盛んな反対に耐え、地元の教会や信徒に支えられ、応援の婦人宣教師も加わって、女学校は発展していった。

### カナダ・メソヂストの社会事業

カナダ・メソヂスト教会の日本宣教の第三の分野は社会事業である。

日本宣教では、明治期に金澤孤児院、静岡ホームの児童養護事業、大正期に東京東部で婦人宣教師による愛清館、男子宣教師による愛隣団、根岸会館、共勵館のセツルメント事業がある。

### 児童養護事業

明治38年、日露戦争の傷病兵や遺族の生活困窮家庭の子女を、宣教師が保護した。金澤では最初に着任した D. McKenzie 自身が金澤育児院を、静岡では明治39年、R. Emberson が人々の要請を受けて静岡ホームを立ち上げた。しかし、すぐに生活費が重い負担となり、宣教師会議でも、伝道を本務とする宣教師の仕事ではないと、廃止や合併の意見も出たが、McKenzie は別途収入や生活費を注ぎ込んで継続を強く主張し、静岡では町の人々が米を持ち寄り、子供を職業訓練のため内弟子として親方に託すなど、工夫して経営を続けた。金澤育児院は中断したが、その主旨を継いで現在は梅光会となり、静岡ホームは現在も継承され、保育所その他の関連事業を併設して健在である。

### セツルメント事業

セツルメント事業は、それを展開する地域の特性によって取組み方に差異があり、教会との関係にも若干の相違がある。愛清館は大工場密集地域にあり、教会は亀戸教会。愛隣団は細民地区で、教会は施設内の日暮里出張所。根岸会

館は近隣商業地区で、教会は隣地の根岸教会、共勵館は零細家内工業地区で、教会は敷地内の請地出張所である。

地域特性に適応して、教会優位で事業付随型、事業重視で伝道追従型、同格で並存型があるのは、伝道と教育と社会奉仕の一体展開が硬直せずに躍動したからである。セツルメント事業には政府補助金はなく、運営資金の大半がカナダ・メソヂスト教会の拠出金で支えられ、以下、日本メソヂスト教会の呼びかけたクリスマス隣人愛献金、各種学校や幼稚園の授業料、諸会費、寄付金、そして御下賜金と続く。事業の総責任者は宣教師で、根岸会館が本部となり、施設ごとに主事が配置され、数名の部署担当職員と多くの奉仕者が働いた。セツルメントの名の由来の住み込みの奉仕者 (resident) もいた。

## 愛清館

欧米の禁酒運動を継承した婦人矯風会は、女性擁護運動にも取り組み、日本に工業化が始まった明治35年、機織工場の工女虐待事件を端緒に、女工の教育救済に乗り出し、工場における講話・娯楽の提供を呼びかけた。当時、東京の城東地区には紡績工場が増え、伝道宣教師ミス J. Howie が、工場に頼まれて講話をしていた。その後を託されたのが東洋英和の英語教師ミス A. Allen で、大正4年から紡績工場に出講すると、好評で別の工場からも依頼があった。しかし、麻布の宣教師館から通う時間が借しく、工場の近くに住むことにした。婦人宣教師会は、煤煙や浸水、風紀の悪い危険地区に独身の外国人女性が住むことに反対した。しかし、芯の強い彼女は工場の近くに家を借りて住む。すると、工場宿舎の女工たちが休日に訪ねて来て、寄宿させて欲しいという。その身上や希望を聞いて寄宿させ、生活指導や聖書の学びを始め、これを愛と清純の家「愛清館」とした。寄宿者が増えると日曜学校を開き、地域の人々と交流が進んでその生活状況が見えると、宣教師会の援助により本格的な施設を建て、女子クラブ、英語夜学校、児童図書館、人事相談、幼稚園、河に浮かぶ運搬船の水上生活者の援助と多彩な事業を展開した。関東大震災では川と風向きに助けられてると被災者救済、医療奉仕、授業補修など1年間にわたって奉仕した。戦時中は信州追分に幼児疎開、空襲で建物が全焼、戦後は共勵館の再建にあわせて合同し、共愛館となった。近い将来、法人名を愛清館に戻す計画である。

### 愛隣団・根岸会館・共勵館

C. Eby の宣教師募集に応じて自給宣教師として来日した J. Saunby 宣教師は、26 年に及ぶ金澤勤務の後、大正 7 年、東京に転任して中央会堂で C. Bates 宣教師と学生や会社員らの伝道に当る。下町の本所・深川から参加している青年から「下町にこういう会が欲しい」と聞く。当時、東京のメソヂスト教会は、西部に 9 教会、東部に 5 教会で、本所・深川にはなかった。Saunby は、本所・深川にメソヂスト教会を建てよう、然しこれからの伝道は教会だけでなく、住民の生活や必要に応じて伝道と教育と生活支援を一体的に行うべきとして、大正 8 年の東部年会で、「本所深川ミッション」を開設した。手始めに、亀戸にあるミス Allen の愛清館と連携するため、大井蝶五郎により亀戸に民家を借りて講義所（亀戸教会）とし、その北の家内工業密集地に女子の愛清館に対応する男子労働者の寄宿事業の土地を用意し、亀戸講義所の請地出張所とした。大正 8 年、Saunby は、青山学院出身で内務省囑託の生江孝之に会い、鎮西学院出身の東京府慈善協会幹事の岡弘毅を紹介され、その案内で、本所・深川で展開する米・生活用品販売や簡易食堂などを視察するが、既に佛教団体や救世軍が取り組んでいた。

次に、慈善協会が東京で最悪の貧民地区日暮里で始めた日本最初の「貧民地区改良小住宅事業」を視察すると、ここで事業をすると決め、ミッション名も「東部伝道教区」に変え、大正 9 年、近くに民家を借りて、大井蝶五郎の担当で貧民の救済と不登校児童の指導を始め、改良地区内で夜間施療を開始した。これを、隣人愛を実践する騎士団になぞらえ『愛隣団』と名付けた。Saunby も宣教師館を出て近くに住む家を探したとき、中央会堂の協力者小林弥太郎から日暮里に近い下根岸にある別荘を寄贈された。しかし Saunby は再び肝臓病を発して急遽帰国、代わりに金澤から P. Price 宣教師が呼ばれて事業を引継いだ。大正 9 年、Price はこの別荘に住み、庭に施設を建て、階下を愛隣幼稚園、二階を英語学校として『愛隣園』と名付けた。教会と日曜学校で開き、盛況であった。大正 13 年、ここを『根岸会館』と改名し、向かいの小林の土地も借用して、根岸教会を建てた。

一方、日暮里の事業が手狭になると、小林弥太郎は日暮里にある染物工場を改修して130坪の隣保館を寄贈、Priceは此処に、救済部、教化部（日暮里講義所／愛隣教会）、無籍児のための愛隣小学校、児童授産所と学校給食、夜間裁縫学校、診療所を開設した。昭和4年からは愛隣中学校、図書館、各種クラブ活動、健康キャンプ、貯金組合から助葬まで、すべての年齢、すべての生活面にわたる本格的なセツルメント事業を展開した。

関東大震災の翌大正13年、東京府の復興事業の一環として、前記の家内工業地区の吾嬭町に労働者の宿泊指導施設「吾嬭町労働館」を建て、請地講義所（吾嬭教会）が併設された。翌年『共勵館』と改称され、前記の愛清館の協力で吾嬭保育園が併設された。昭和4年に東京府との契約期限が終り、愛隣団と同じ隣保館として事業展開を開始した。昭和8年には失火で施設が全焼するが、バラックで活動を続け、翌昭和9年、新館が竣工すると、愛隣団に準じて多彩な事業を展開した。

Price宣教師は大正9年～昭和10年の15年間、東京東部伝道教区というカナダ・メソヂスト教会が支えた社会事業を実施した。大正14年の休暇帰国を機に、新任の社会事業宣教師G Bottに引き継ぎ、日本メソヂスト教会東京部会の社会事業委員会、また昭和4年から年会の社会局長としてメソヂスト教会に社会事業の重要性を浸透させた。教会機関紙に『隣人愛』という社会事業特集を入れて普及に努めた。

参考資料：R.T. Handy: *A History of the Church in the United States and Canada*. Gwen R.P. Norman: *One Hundred Years in Japan*. カナダメソヂスト日本年会記録および日本メソヂスト東部年会記録、その他。

(日本基督教団頌栄教会 信徒)